

# 「あなたは神なのか」

真宗大谷派見成寺住職  
原告 日野詢城



私には15才ほど年上の伯父がいました。弟のように可愛いがってくれ、一緒に野原で植物採取をしたり、蝶々を追っかけたりしたこともあります。空に舞い上がる蝶を楽しむに見ていた伯父は、私が13歳の時、亡くなりました。夏休みに2人目の子供が生まれ、その秋のことでした。バイクの練習中に転んで怪我をしたと聞いていました。病院で手当を受けましたが、怪我の程度は軽いということで、翌日は普通に学校に通ったという。事故から2日目の授業中に頭痛が激しくなり病院に行っただと言います。入院して3日後には亡くなり、死因は「被曝による白血病」だと言う。学徒動員で長崎の工場にいた伯父は、地獄のような惨状を見て、山に逃げたという。それ以上の詳しい話はしたくないようだった。

被曝から13年目の死だった。「原爆医療法」が制定された翌年である。被曝手帳は持っていなかった。2人の子供の父になって契約した生命保険は、被曝の申告がなかったという理由で保険金は支払われなかった。

伯父が亡くなった頃、「原子力の平和利用」という言葉が、新しい時代を謳歌する様に飛び交った。私はその言葉に抵抗はなく、チェルノブイリの事故まで「原発」に対して全くと言ってよいほど無関心であったと思う。80年代の初め、若狭でご縁のあったお爺ちゃんに連れられ、初めて原子力発電所に行きました。その時「子供や孫達の職場が得られると期待し、誘致に賛成したが、この土地はわし等でもう終わりだ。誰も住むことができなくなる。」と、ふと洩らした姿が思い起こされます。

1986年のチェルノブイリの原発事故から2年足らずの、1988年2月に四国電力・伊方原子力発電所で出力調整実験が実施されました。原発そのものの危険性が訴えられ、多くの人が原発について学び始めたそのタイミングで「コストダウンのための出力調整実験」が強行されたのである。2万人を超える人々が全国から集まり、実験の中止を求めた。

1988年の出力調整実験反対運動の中、四国電力本社前の集会が始まって2時間程たったとき、代表者による交渉が電力会社の会議室で行われると発表され、会場に多くの人が詰めかけました。議論は真っ向から対立、怒号の中で1時間余りの時が過ぎ去った。「絶対安全」を繰り返す電力会社の答弁を聞きながら、私どもは徒労感を覚え始めていました。その時、1人の女性が悲鳴のような声で安全だと言い張る技術者にむかって叫んだ。“あなたは神なの

か……！”

会議室は一瞬沈黙に覆われました。電力会社の技術者はしばらくして「私は神ではありません。」と答え、「20万分の1の事故率だから安全だ。」と議論の方向を転換しました。しかし確率の安全性はあくまで想定で、何の保障もないことがスペースシャトル・チャレンジャーの事故で証明されていました。安全性の議論が空転する中、もはやどんな言葉も説得力を失い、企業側は逃げるように退席しました。

その直後、実験は強行され、会場はどよめいたが、実験結果は公表されなかった。その後と同じような実験をしたということも聞いていない。「出力調整はできない」という結論だったのだと思う。

2000年9月13日の朝日新聞特集『忘れられないあの言葉』で「あなたは神なのか」という言葉をあげ、その時の気持ちを述べました。

私はその時の光景から一つの共有すべき視座があると感じています。

神なのかと問われると、「神だ。」「絶対者だ。」「間違いなどあるはずがない。」等と答えられるはずがない。つまり「絶対」という概念は人間には成り立たない。必ずどこかに漏れがあると言うことです。それを佛教では「有漏の知」といいます。不完全な存在だということを知る知恵です。人が、その立ち位置を間違えると「魔境に入る」と言われています。ある時、絶対者が現れ、それを信じる人が集まると迷信が始まります。一度そのことを信じてしまうと、死をも恐れず、殺をもためらわなくなるといわれます。科学の分野でも「科学を迷信する」ということが起こっているのだと思う。それが“原発”だと言えないでしょうか？「安い電源」「無限大のエネルギー源」「安全な装置」など、何れも幻想だと解ってきたはずですが。取り返しのつかない過ちを犯したと思わないのでしょうか。その過ちを糾す道はただ一つ・「脱原発」であり「廃炉」でありましょう。原発関連の多くの研究者や技術者は蓄えたその技術をもって、道筋をたて廃炉の道を進むことが、今待たれているのだと思います

それが人類の責務だと思います。稼働すれば無限に増殖する放射能の問題を放置することはできない。福島事故処理ができない間は、せめて再稼働をしない。その約束から次のステップへと進む責務があなたの会社にあると述べます。

以上